

JAPAN  
• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3

西洋新書初編卷之上

東京

瓜生政和編集

巴那麻港地形氣候の説

巴那麻の地ハ北亞米理加必と南亞米理加必との東方太  
西洋の岸トある港とアスピンウラールといひ西の方太平海の  
岸トある港と「ハナマの地」とゐす「ハナマヨリ」アスピンウラールの  
間ざ道程僅ク不二十二里北亞米理加と南亞米理加との兩地の絞  
き目ふトて誠小咽喉の要地スの如きの場所と地峡とりふ  
地峽ハ海の中へ両國の陸地細く出で合ひ連合をす所の狹き

津  
門號  
卷

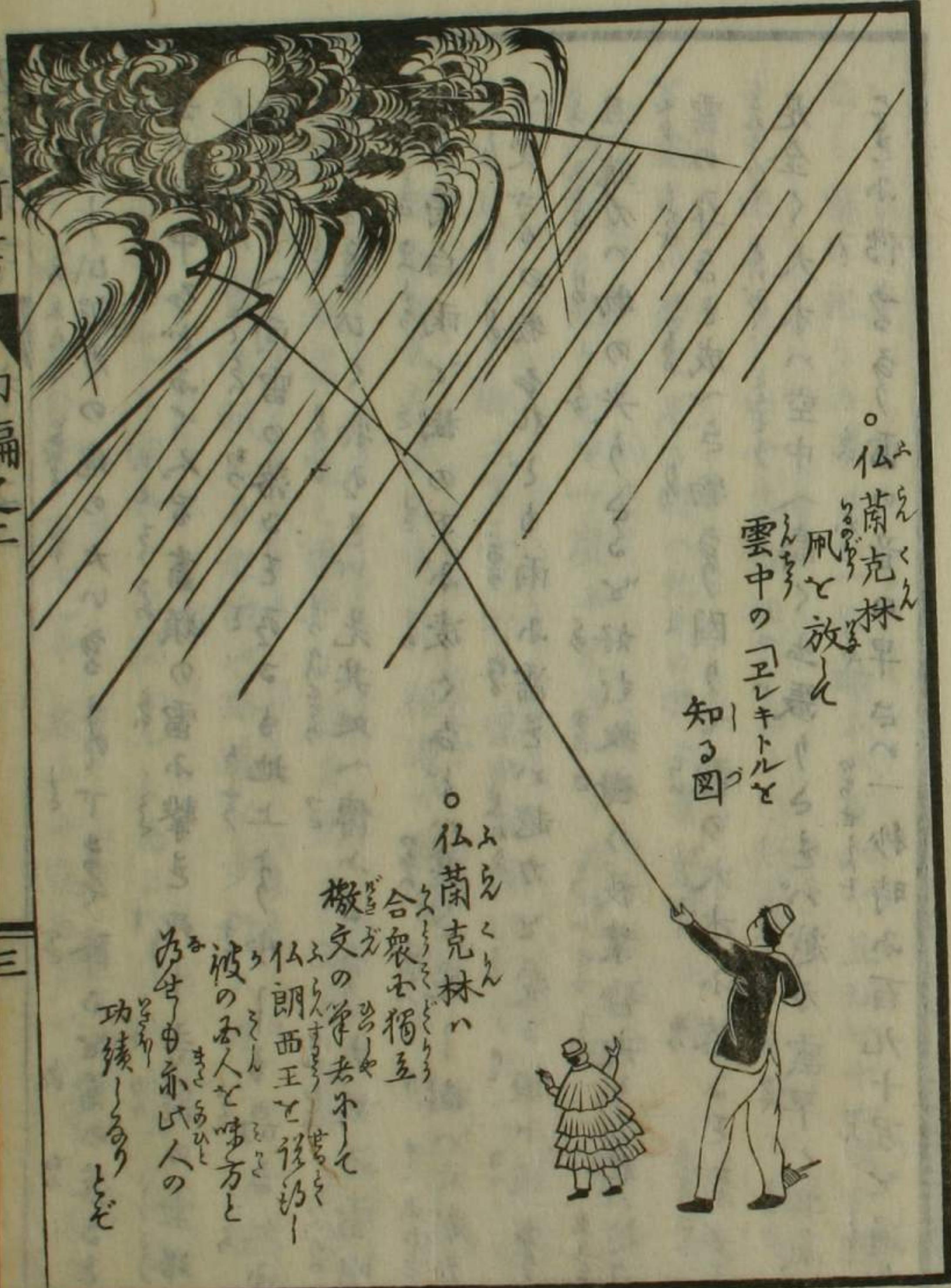
165  
2

地不一て亞細亞昂と亞非理加昂の間不蘇士の地峠あり是モ  
「巴那麻」の地不似テアビ近ヘ南亞米理加昂中の獨立國ニウガラナ  
タ昂の領地不一て赤道直下より少一北不あり一年の中不ハ日  
と北の方不見る月も多キ日輪兩度直上へ来る熱帶中ある  
故時候春夏秋冬の差別かく暑氣強く雷鳴矣と常不  
多一

○雷電ハ皆雲中不發する處の「エレキトル」不て誠力のみナ業ト  
ヨリ可見極ム一ハ北亞米理加の「パンシーバニー」とリノ國の「ヒラドル  
ヒー」とリノ町不住宅ぬ一居ミ「仏蒙克林」と云ふ人不て千七  
百五十二年日本の延享元年不當り今より百十九年あ「仏蒙

仏林ハ夏の日の驟雨の起るを待ちテ「エレキトル」の失力の論  
不基ミ失リの亞銀の管を附ス布不て張リ一風と  
長キ麻の糸不て揚荒雲の中不放ち一不雲の越力  
の大畧「イレキト」麻の糸不傳ム不徒つて柔軟と柔セ持テ手  
ルの絲下不あり不感トテ次第不動搖ム一糸不耳セ考せて笑ハ小さき曾  
と發一トリ因リテ猶是と種ヤ不一て紳愈す不越歎久登  
苗巻不起セ一「エレキト」も異ハズ爰不於て仏蒙克林我  
ヶ家の屋根不鉄の柱と建て是不少さき鈴と附若一空中  
不越力と催モ時ハ忽地此柱不傍ツ鈴と鳴ナ不て雷氣  
至るを知りて是避雷柱の靈験アリ荒雲とりハ別不

有る小非キ越力エカツルの起りキ一雲キモありキモその雲キモの中ナカニ小陽ヤハラヒ越力エカツルと  
 舎む雲キモと陰クモ越力エカツルと舍む雲キモありキモは越力エカツルの雲キモ互ハタハタ不空中アツマツ  
 出合イハタひ陰陽インヨウ和合エハタの雲キモされば引力エカツルと生ト互ハタハタひ小引ヒキ考トトロせ陽ヤハラヒ  
 と陽ヤハラヒ又アリ陰クモと陰クモの雲キモありキモとば追力エカツルと生ト互ハタハタひ小相離ハタハタモモありキモ  
 引力エカツル追力エカツルの速ヒテきと一秒ヒツ時の弓エカツル小百八十石エカツルと驅スル一秒ヒツ時ヒメシ  
 日本ニホンの半時ハーフヒツと三百六十小割エカツルりリ一イチツヒツ小ヒツ九脉クモリ一イチツヒツ打ヒキワハタハタご  
 きヒ斯スの如ヒく引力エカツル追力エカツルの雲キモの往通エカツル空虛クモリと空氣エカツル早ヒテく塞ハタハタ  
 グヒんとヒて空氣エカツルと雲キモの越力エカツルと捨スル合エハタひ音エカツルを發スルす則ナシ雷エカツル  
 声エカツル又アリ捨合エハタひ時光エカツルと放スル是エカツル電エカツル故ナシ小雷雨エカツル中ナカニ  
 空中アツマツと見ミきバ風雲エカツル或アリひへを寄スルり或アリひへ離ハタハタれ或アリひへ蟠卷エカツル



あるべ一比越力の電の大いきりの下生で降るを雷の落ると  
云ふ野中あどゐて人を畜穎の雷不撃き死一寺院の堂塔  
鍾樓等へ同雷の落るをみるも地上より少くも高き處不  
越力と導びく物などば先其處へ傳ふるより夫故小雷鳴  
ゐる時白雨と樹の下小凌ぐみどは甚ざ危一樹ハ元越力  
を受ざるの物されども雨小濡とば越力と受る根小成  
且「越力ハ物の尖りるを好む故樹の枝葉皆尖りされば越力  
雲の尖りと成べき物なり因りて雷の大木小落ると最多一  
是全く大木ハ空中へ高く張りこまば越力雲早く其氣と  
ことか傍立ち雷の音の早さ一一秒時小百九十九と通り

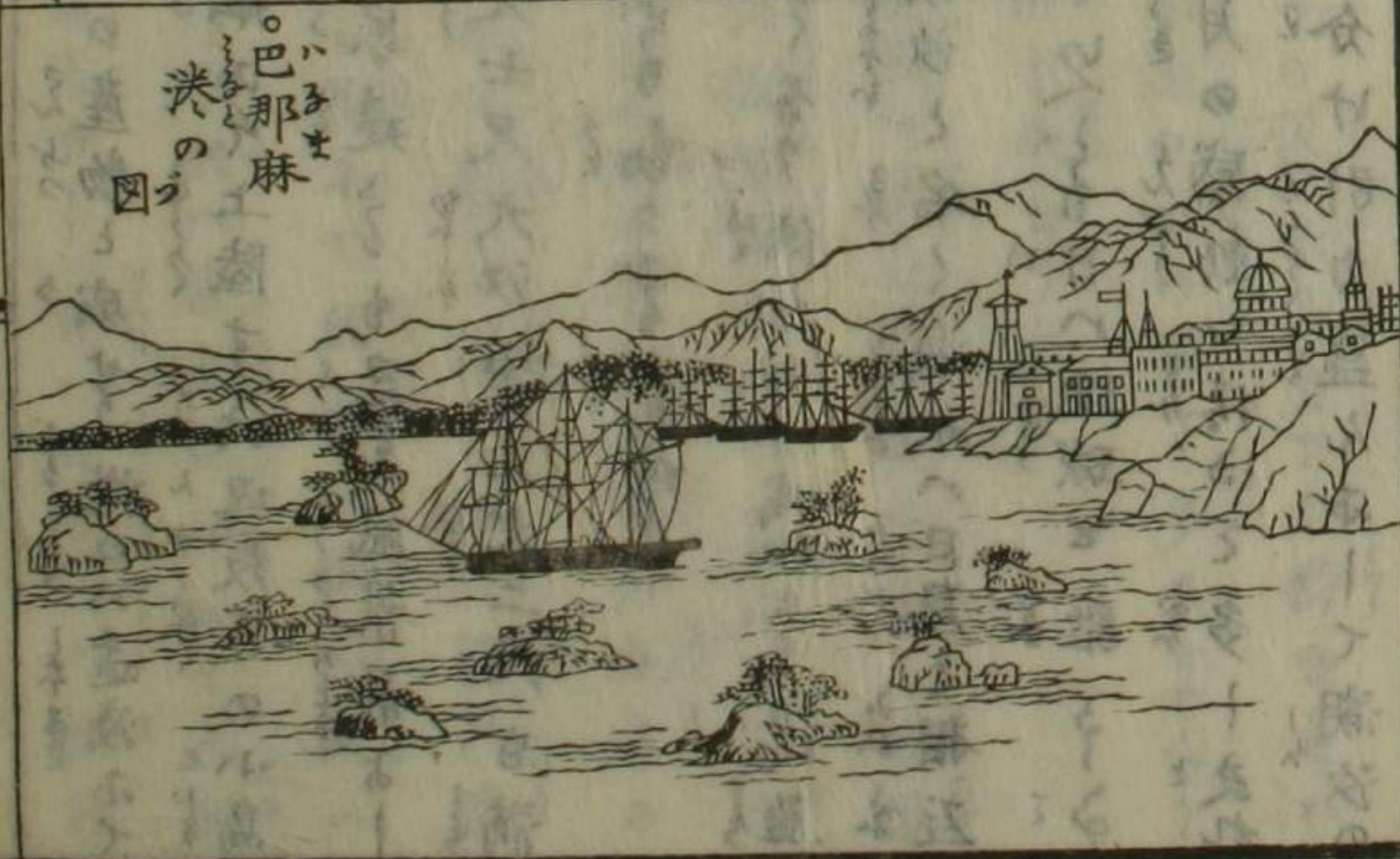
越一電の光りの早さ一秒時小八万六千五百七十四里の遠  
さ小達かるといふ其證拠とあるハ野原にて小銃を放ツ  
と遠く不居て見る時へ光りの後不音と空き近く不居て見  
せば音と光りとて一度不見るべ一然きばけ理と一つや  
電と見一す脉ニツニツ打て雷声と聞けバ雷七八十石と  
よ故也モ不見らず又電す程過て雷鳴聞ゆるへ遙不越  
力雲の互處遠一電と雷声と整發あるハ思とべる甚矣  
より故ふ雷鳴頭上不近附バ路道と歩行ば増一て保体  
不く屋根へ當り雨などと防ぐとあるハ實不危ふきの極  
め不て私と戒めざる可さんや思ふ雷の声へ大うと能も

是ぞ雷の鳴處より上不居て安べ下不居て安音の三分の一不も  
過ぎるべ一嵐の天井と駆走るを下不居て安べ其音人と  
驚かす程あれども是ぞ上不居て安時へ凶うふ一耳と聾  
て非べ安えざる如一驚れば雷の音も空氣と雲中の「エレ  
キ」との相合ふて發す音あまぐ下不居て安べ如きの轟き  
みてん非ざるべきを雲の「エレキ」へ火打石不一て空氣へ火  
打鎌ゑり石と鎌相合ふて音と云一炎と放せ不至ふる

ムベー

地四月より十二月迄ハ雨降て夥一けをば湿氣深く衣服膳椀の  
類生で黴の生るて日本の五月雨の頃より甚ど一地形ハ

中亞米理加と南亞米理加との山脈儻  
あればも低ふ一鋸の歯の如く近傍  
キ「ホラルトヘロ」といふ處の東の方ふ  
廣大無辺の丘陵あり古木老樹生ひ  
茂り林藪蒼々と一數百里の間に  
蔓延とば良材を産一出すて多と  
ども虎豹熊ろじの惡獸夥矣小  
より容易小切出一難一野猪角  
のれひも又多くけ山林小産ナト  
地饒大一て菓実の熟す不宜く



西洋新書  
補編卷之二

五

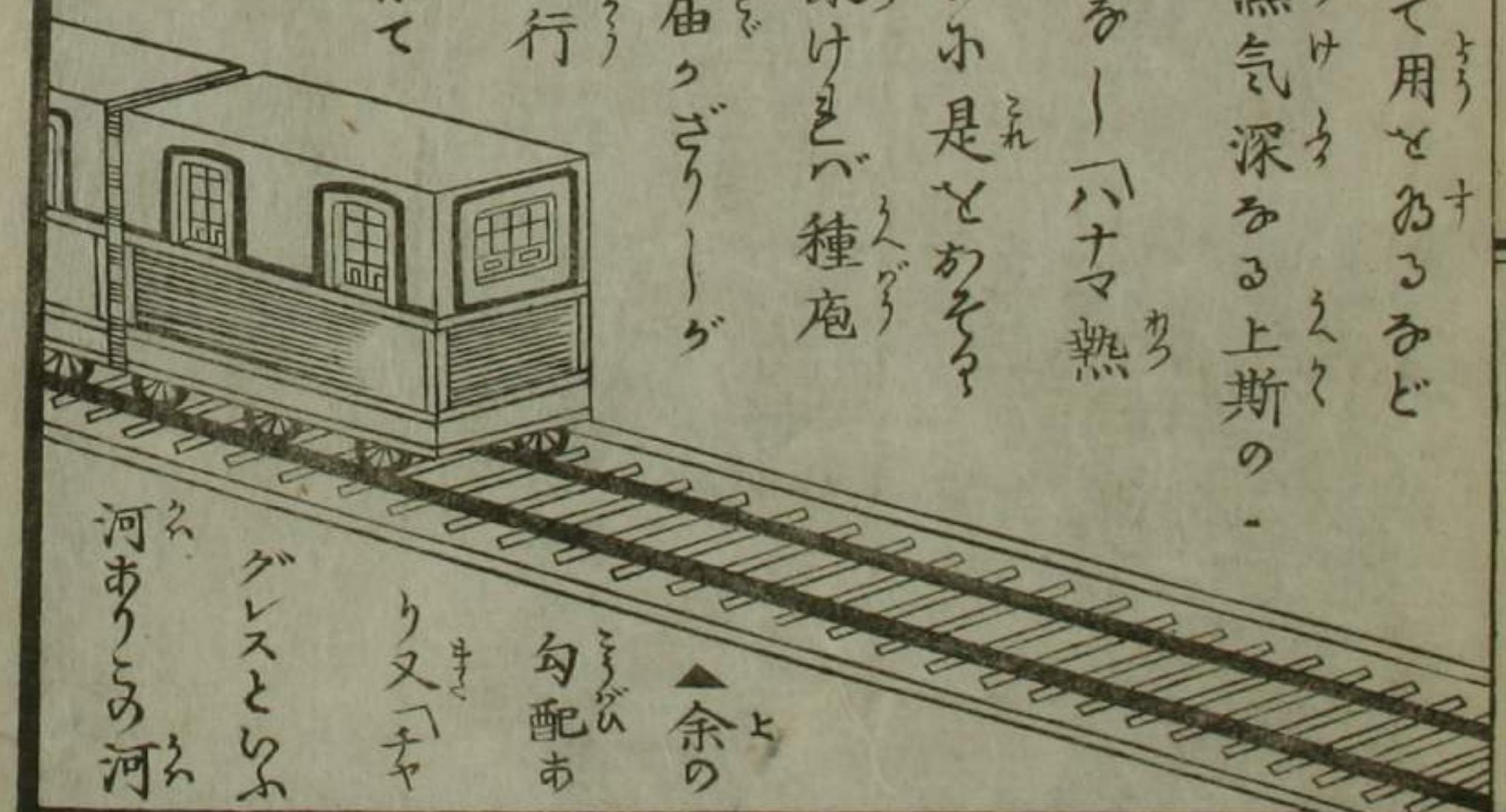
木綿。乾革。皮革。石炭。など以て当地の產物と成り。港口へ遠淺。大船は一里半をくり。沖不掛り小船にて上陸す。港數百の小島あり。小島の中。小。兩三軒。人家建るも。尼。風景最。海中汐の満。丁度。一丈士尺。大汐。二丈二尺。も満。丁度。ヨリ。折。不。觸。て。小。船。と。り。て。も。動。く。事。アリ。海の水の面。一晝夜。み。して。二度。多く。少。低く。高。減加。ある。盈。來。リ。涸。往。運動。一。て。止。ま。ず。之。と。潮汐。と。名。く。海水。日月。相。互。ひ。不。引。く。力。ふ。因。り。て。満。丁度。アリ。と。り。ど。日。地。球。離。アリ。達。く。月。地。球。距。近。け。月。感。動。と。信。多。一。え。故。不。日。月。同。方。不。在。とき。取。分。け。引。力。盛。ん。ふ。一。湖。汐。

高低。最。甚。一。是。と。大。汛。と。名。く。ハナマ。の。辺。赤。乃。直。下。の。傍。アリ。日月。と。地。球。の。距。離。最。近。き。所。有。故。海。の。水。多。き。アリ。是。全。く。日月。と。海。水。の。引。力。強。アリ。と。ぞ。

港の波戸場。小。三。町。余。の。桟橋。屋根。附。屋。掛け。出。一。物。揚。場。と。あ。る。アリ。市中。家作。立。汎。屋。皆。他。國。人。の。店。不。一。土。人の。居。宅。甚。ざ。見。悪。く。少。一。在。方。ア。ビ。ヘ。入。ク。テ。皮。附。丸。木。柱。と。堀。建。ア。リ。櫛。子。葉。屋。根。葺。木。櫛。も。ろ。く。壁。戸。障。子。と。云。ゆ。ア。リ。柱。め。ら。柱。網。の。様。ア。リ。物。釣。床。掛け。夜。の。上。小。床。ア。リ。十。才。以。下。ぐ。ら。の。子。供。皆。丸。裸。体。土。間。不。轉。付。居。容。子。更。小。犬。豚。と。異。ア。リ。女。腰。卷。一。ツ。掛け。

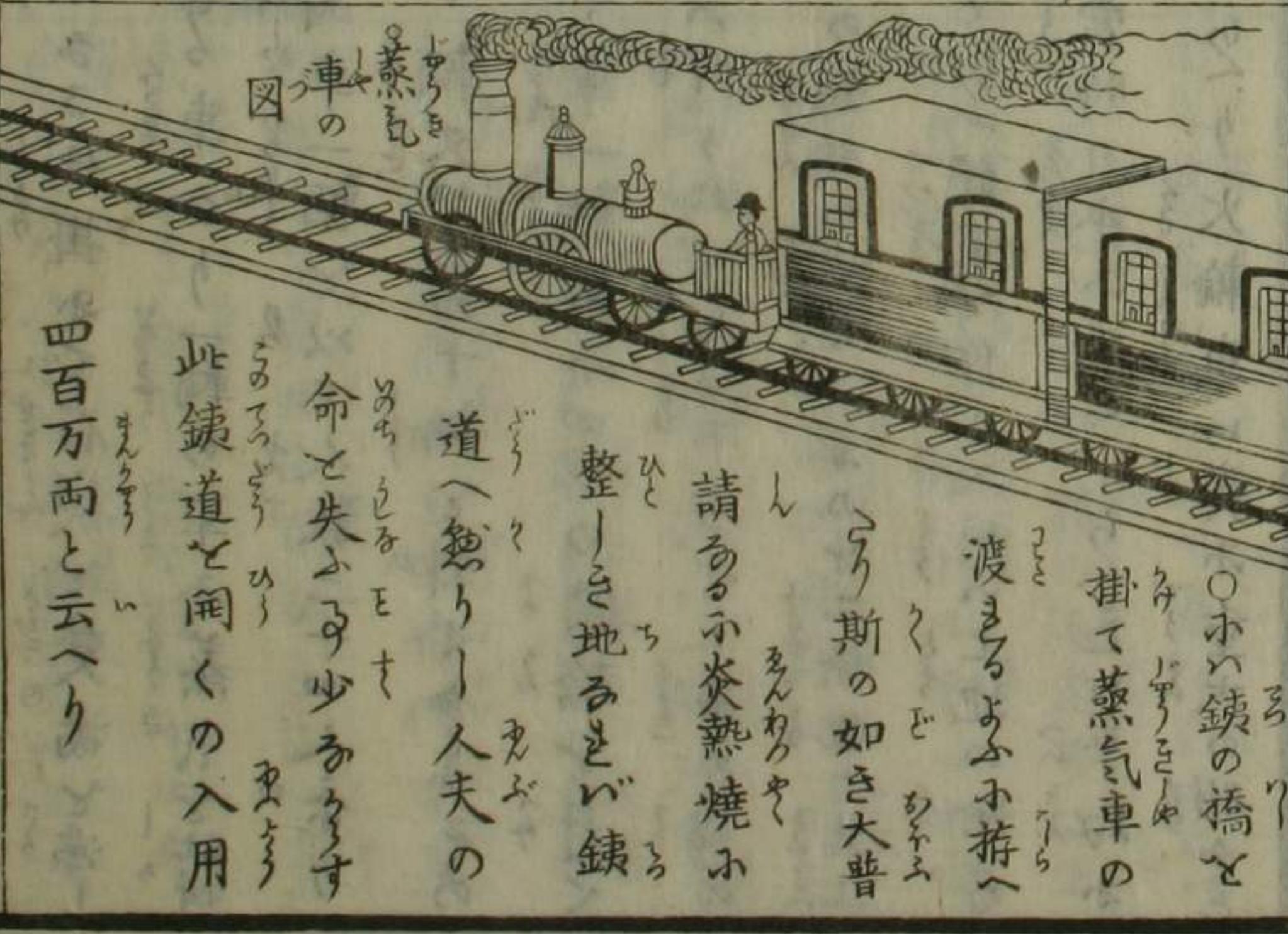
西洋新書  
解説卷之二

立歩行あぐら物と食ひ寐匍匐うらまみて用をゐるなど  
人倫の道りまく開けぬ處あり土地大の濕氣深かる上斯の  
如く常ふ土同み居る故熱病折々流行るハナマ熱  
とて甚ざーき惡症あまび西洋人も大いふ是とあそ  
と云り惣じて土人頑愚かれて疑心深けとば種痘  
瘡の法と用ひず政府ふても世詰行届クざりーダ  
五年あふハナマの港ふて疱瘡大いふ流行  
アーチ人家二千軒人口一万人斗りの中ふて  
千人余も死亡ふ及びうと云ふハナマの  
地よりアスピンウラルの港まで蒸氣車の



▲余の

鍛道あり是ハ千八百五十三年今よ  
り十八年あは兩港の間通路悪  
く且熟地かとば何とも不便利か  
るを憂え英吉利佛榮西合衆國の  
三ヶ國の人々言合せ翌年の五月よ  
り普請と始どめとど途中ハ残ら  
ず山ふてハナマより五里をくりの處  
丈あり夫故ハナマより次キ上り小路  
と附坂の急き所ハ一里の間不十二丈



○小ハ鍛の橋と  
掛て蒸氣車の  
渡るよふ不持へ  
リ斯の如き大昔  
道へ憩り一人夫の  
命と失ふ少ある  
請うる不炎熱燒ふ  
整一き地あまび鍛  
此鍛道と聞くの入用  
四百万両と云へり

蒸氣車（じょうきしゃ）ハ蒸氣船（じょうきせん）と同様（どうよう）仕掛（しかく）ふて石炭（せきたん）と焚湯（かねうとう）と沸（ひ）その湯氣（ゆうき）の力と以て走らせる車あり一輛の車ふ蒸氣と仕掛け之と機閥車（きはんしゃ）と名づけ機閥車一輛と以て人數二十四人乗りの車と一輛（りょう）鉤（つる）合せ二十輛又ハ三四十輛と引くありその製作大ふして最も手固く車一輛毎小四ツの鋳輪（じゅりん）と付て走らましをば尋常の道ふてハ行かれず地を平らふ一車の輪の當る所巾二寸厚さ四寸計りの鋳線（じゅせん）の溝（みぞ）あるものと二條埋め其上と往来（こうりあい）をるあり是と鋳道（じゅどう）といふ鋳道と作る入用ハ土地の陰易ふより同一の轍（わだ）と雖（え）ど當時日本ふてこへりとば平均小一里小升三万兩程（さんゆうよう）かふとりくり火輪車（ひりんしゃ）の真（まこと）重大の物（もの）を



「ステラシ」  
初（はじ）より蒸氣車（じょうきしゃ）の  
速（はや）たと  
遣（けん）る

ども蒸氣の力と以て是と引きれば  
やるく走りて行路の迅速（そんそく）かふと  
蒸氣船（じょうきせん）の波と押切（おさ）て行（ゆ）が如き  
りの不あらず通例ふれて一時三十里急行ふ至りてハ一時五十里  
走ふと言へり蒸氣車（じょうきしゃ）の發明  
も大抵蒸氣船と同時代かど  
ども之と實地不用ひざるハ蒸氣船より晚一千七百八十四年  
今よりハ八十七年あヲルレム。

ムルトックとりふ人初めて蒸氣車と製一出せど輕少の玩具  
ものあり其のち二十年と経て千八百二年ふ至り今より六  
十九年あリチヤル。ドレフヒツックとりふ人機関の工夫と  
付ことども是とも實地ふ用やるふ至らず千八百十二  
年今より五十九年あ英吉利人ジョージ。ステフェンソン  
蒸氣車と造りて石炭と運送せり。初より千八百  
二十五年ふ至り今より四十六年あ同人の工夫ふてスト  
ックトンとりふ處よりタルリントンとりふ處の二三里のる  
不鍛道と作りて始めて夫より歐羅巴諸國ふ及  
び又亞米理加ふても其法不效ひ國の中へ縱横不鍛道を作り

遠近ふ拘へらず蒸氣車と用ひふと成り。蒸氣車行ふ  
きてより千里の道も遠一とせずして各地の産物を積  
いぞー交易する不難船のうとへあき船ふとば万々不  
都合よろしく物の價と平均やへ都鄙の往来と便利  
ふせん。又人情相通じて俄ふまたヨリの際と新ふあこ  
りとり。西洋の人のえろくふ近來こびへ出て父母妻  
子のやあひと聞きとふくしてその死期ふかく見る様  
の迂遠ある事ふと云へり是とまつてノーショーンジ。ステフ  
エンソーンの賜物ふとば人の英吉利のノースオーストラニアと  
云ふ所の生れう。兄弟多く家貧すとば父母へ今日の烟りと

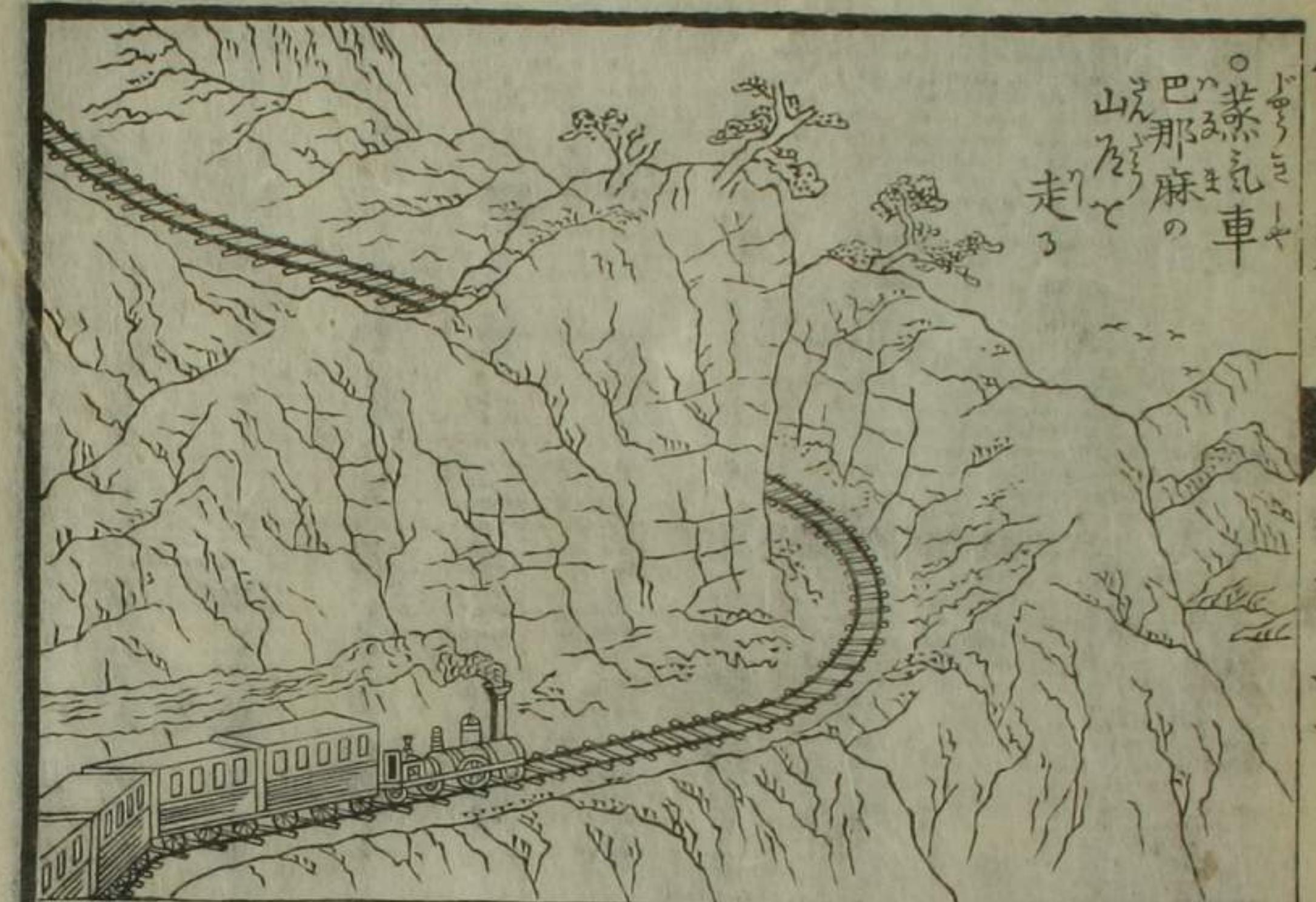
立兼るふ因りて「ステフエンソンも九歳の時より隣りの家へ雇へれ  
一日小七分五厘の賃銀と兼ひ牧の牛の番人ともり又農業の  
日傭等して居る」  
「父ハ「井ラムと云ふ處の石炭の蒸氣の火  
焚と活計し為し居る」  
「がハ「ステフエンソンも年十四の時石  
炭山の火焚の手傳とあり父と共小稼ぎて父が今日の営生の  
助けとおし居る」  
「石炭山の社中の者「ステフエンソンを見て  
キ智あり少人よりとて各是とぞ」と云う所で「ステフエンソン年  
十六成りとど些の手を乞ひ做ざれば我姓名とどく讀み能  
ハモ夏小於て書々生活の業と歎き夜は其地の童子の  
中少打雜り学校へ往き書々讀み文字と書き算術を學び

寝喰と忘れ勉強もる年二年からて大畧其業へ達し「ス  
テフエンソンハ性來諸事不器用と云ふ人の為小時斗と修羅一  
履と舊い衣服の破れと縫くに襦袢の垢付くると洗ひ何  
等の煩勞と雖も我活斗と助く可き云々されば少一も是を  
憚ららず其用向と達一ふけとば石炭山の社中へ評にて  
百需全備の才物とすがの如くされば隼人の中より  
拳られて早く石炭山の役人と成一小因り少一の宥豫  
出来る故其右隙の時ふすと古来未曾有の工夫と案じ早  
ふげ蒸氣車の機械と製造し又鐵道の發明と得て是と  
英國小定と初め次で諸弔不押及ばずふ至り國內へ勿論外國

うちも招待と受て澤山の給料を得るに至れば漸かに家富  
ミ榮へ豊小老と送りより一も蒸氣車鐵道の發明不因り  
てより今日本も東京と横濱との方小鎮道と通じ丘と割  
り海と埋め六日川へ鉄橋と渡すの大業七八分へ出來るを  
近く不全く成就るも、昨日へ漸く不覺にて蒸氣車  
の迅速も明日へ日のあふるのみと得る文明文化の世に逢ひ  
て誰う樂しとあらうや

千八百五十五年即ち日本安政二年不普請成就して極熱の  
嶮路と少一の足り勞らず暫時の名不「アスピンクヨール」まで  
至るい實不蒸氣車鐵道の蔭にて其功最大うりずやハナマ

より「アスピンクヨールまでの蒸氣車賃銀一人あつて二七四ドル  
ヨリ蒸氣車大小不同と雖ども大概一車の長さハ間巾二呂左右  
ニツツづ四の車と附一車へ二十四人と乗せ片側十二人で両側  
へ並び腰と掛け中と通行の道とあるを合ひ大勢うとべば車  
と何輛も擎き合せ先へ蒸氣の仕掛ある車と擎き夫の階勢  
と以て引するふ極の熱國ヨリ上雨氣強き地されば蒸さる  
如くふて只居てへ暑き堪え難いとりども車の走ると矢うも  
速うとベ涼風自ら生ド女車のもの却て炎暑と凌ぐ不宜  
わうりよくて往々鐵路ハ二條ありて往来と別ツ「サンフラン



シスコとニウヨルクとのるの陸地  
差渡一東西千六百里余のち  
不蒸氣車の道と作り過半へ  
出来されば此後二年の内オハ  
成就まべーとテ此漢道出来  
上れバサシフランシスコより直モ  
ウヨルクへ往わるやハナマの巷ハ  
着船減トで自づと林一く成ヘケ  
キド日本より亞米理加の地(往來  
大きふ便利ヨリ)とリ又傳信

機ともハナマとアスビンウラールまで引渡一急便の用不備ヘテ  
傳信機ハ越列機駕兒の氣の力と以て遠方小音信と傳ふる  
仕掛けの物小て越列機駕兒の事ハ支那人も未だ知らず日本人  
人も是までの略一不空とゆもあき仕掛けりその仕掛けの訳  
えのエレキトルの條下ふ少一解記一さきどろく六ヶ  
ノ一寸とい書取難一然れどもその趣意ハ鍛錆小越列機  
駕兒の氣力を通せる物小ては處小越列機駕兒の仕掛け置  
彼處不鍛錆の仕掛け設けては方と彼方の不銅の線を  
張りけ線より越列氣と通ずれば距離の遠き近き不抱つま  
其氣心地鍛錆ふ感じて運動と得る故その動機と針の

## ○海の底へ傳信機

引手図

。俚俗の古俗不三山六海

一平地と移く山ハ地球の十の六平地ハ

海ハ地球の十の六平地ハ

地球の十の六と云ふと

西洋人の從手圖

アカウス地脉の三分三厘て極て

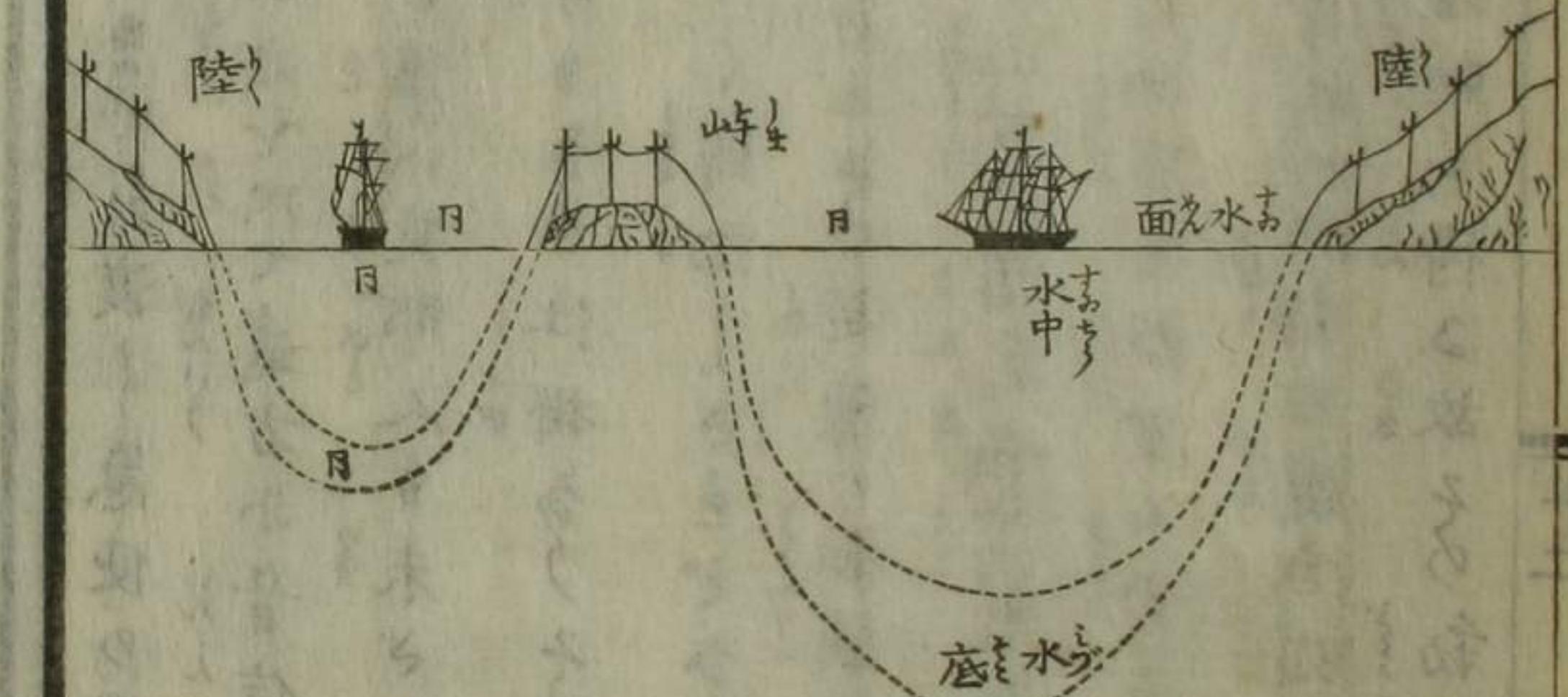
平地と山と等とあるて妙ノ事

六ハリシと以て海と云ふ

亞米利加乃ハ平地廣く山少く

六ハリシと平地と

ニハリシと山と



先へ傳え紙ふいろはと書て置針の先の指す處の文字と讀で  
往ば用向訳るあり傳信機の神速さと千万里の處へも一ト  
瞬の間ホーで達す是より彼一通きる銅線の太さ一分五厘の  
物ふて作とバ一秒時ふ一秒時ハ大概脈一つ打るふ二万五千八  
百九十六里の遠きふ伝え銅線の太さ六厘八毛の物ふて作れば  
四万五千百九十二里余の所へ達すと云ふ其速さと無量と云  
べ一又是より彼へ繩と通ずるふ三四四十置ふ柱と立高さ八  
九尺の處ふ線と掛るうる水か底ふ沈るよりハ綿のまつりと  
樹の膠汁ふて包む水と防ぐうる毛と掛る入用陸不てハ一里ふて  
三百兩ぐい水の底の仕掛け一里ふて四千兩くらゐ掛るべぞ

當時西洋諸國子の海陸とも小蜘蛛の糸の様な銅線と縦横に引  
張つて肝要の消息と通じ新聞を報じ合ひ千里の外の人と  
對ひ合て語すが如くされば公私の便利は上り西洋人  
の詫ふ傳信機出来て世界を狭くさうと云ふぞは傳信機  
千七百七十四年今より七年お佛蘭西人「レサシの工夫さうけ人  
初めて傳信機の仕掛け製せり」以来越列機篤兒の術次方不  
完けふかう傳信機とも改正されど何とも大仕掛けにて実用  
ふ多ふまでお至らき一ヶ千八百三十七年今より三十四年お亞米理  
加の人「モールス五年の力勉強にて大お查明ちくとども貪そにて  
仕掛けと捕らへるゆ出來ざりば合衆國の政府お願ひ三万ドル

を得て千八百四十四年今より七年お合衆國の都「華盛頓府  
よりハルチモール府まで十七八里の力不線と通ド兩府の音信  
を通ド」一と世戦中の傳信機の初めと一千八百五十一年  
今より二十年お英吉利の「ドーウル」とりよ地より佛蘭西不通ぜ  
と海の底の傳信機の初めと一以來は法不效ひ所々の海底不  
線と沈め千八百五十八年今より十三年おふへ亞多喇海と渡  
て千里足らずの所と英吉利と亞米利加との力不線と通ドそれ  
は傳信線へユ合宜一うらぞ一と傍をねるゆ一又捕一直まとぞ  
実不効る在處の海底へ仕掛けの大業おとば容易ふ自由と得ざ  
るを然もあくまん夫地球の表面へ高低山々や一と大お廣く

凹き處不水を充滿せしめしと海と云ひ海の面より出る處と  
陸地と号く水ある處陸地の處都て大小高低の區別不因て其名  
と種々不負きるなり然きバ陸地不山あり如く海の底ふも又高低の  
處あり是を以て深さの極めと考るてへ未だ確と定め難一と雖も近  
頃西洋の洋の中ふて已小四千六百丈不至り三里半程の深さの所と  
測量せしやあり富士山の高さも海面より直立不一て一里三丁不  
過走天竺の喜馬拉山も世界第一の高山もど直立猶二里十  
の上へ生ず爰を以て是と見まば海中の深き處不至りてハ陸  
地小高山のあらが如き物不非ず然ると云海底數百里へ傳信線  
と引の始計実不驚くべきの大業不あらずや我朝不も既不三

年あよ東京と横濱との間不傳信線と通ト見バ近き傍の  
人々不へ除ら一からぬ物みがら来ど見ぬ人のあらむと其大畧と  
僅々不記す

「アスビンウラルの地ハハナマ同様ホーイテ土人の住居甚ざ厄苦一く  
宛然牛豕の小屋不整一く家作の義多ハ皆外國人の住居あり  
此港ナヨ歐良巴の諸國ナヨ」ニウヨロクへの乘脚船出るナリ「アスビン  
ウラルナヨ」ニウヨルクの方へありシる地と總て「コロシビユス」とは是ハ  
「西班牙國」の船將「閻龍」トリム人西へ航海一て初めて此地と見出  
せトサヘは辺を号て「コロンビエス」と云ナリとぞ  
閻龍ハ意太里亞國の「熟那亞」トリム处不生キ一人ふて父ハ

羊の毛と摘て活計となる者あり閻龍天賦の才機万人不勝れ  
とば学問ぬす不僅数月未至らず深く天文地理の奥旨と悟  
豫て幼稚より航海の志一深うりけとば年十四ふ一て船を  
仲る入り大人と成不及んで追々其術不達一傍り近の  
海路ハ深淺暗礁島嶼海岱港々不至るまで暗記知らざる所  
無一年三十五ふ一て葡萄牙國の勤門と云ふ處不住居一廣く  
當世の博学知識の人と交り倍地理学不心と碎き於思ひ計  
る處あまと常不海面不對一て風の模様雲の往通ふ起りと  
監え又磯打波不寄せらもあら機械材木ふど拾ひ集めて歐羅  
巴ハ置東洋の國々不見馴ざる物を時へ眉を顰め是と訝り早ハ

肇明ゐるをあつて奮然と一て言ふ極天地の大うり美ぞば國々以て  
限りとあすべキ西不當つて何程も國土をひ非ざるめや方今東の  
方の國々に残りるく開けし一探索ゐるの地方をひととて未だ明白  
らざるハ西洋中の島々あり然らば是より大船を以て西の方不航海  
支え空ぬ時日と過一けむべひてへ所詮自力を以て志一と遂難  
一古今未曾有の大功と顯へ一名と後代不止めをやと思ひ夫より  
種々の工夫と圓ら一策と費をて頻りあれども入費の金子不差  
支え空ぬ時日と過一けむべひてへ所詮自力を以て志一と遂難  
一と思ひ葡萄牙王「約翰」不西洋中の國ある處と求め來らんと  
と以て説ける不此王性來鄙吝の心深ければ閻龍が説を宜一と  
あこせど表不是と請得ぬ振て潛小臣下の者不命ド西洋の



船路と索めさまる小猛烈劇波小  
閣海上と望んで  
西方小風ありて  
知る因  
困りゆうき空舟船と戻り来きべ  
葡萄王然社あらめと其侵小捨て置  
ければ閣龍ハ本國不立帰り意太  
里亞の政府不願ひけれど意太  
里亞の國王も用やるど然いぞ故不又  
英吉利不往て「ロンドンの應不訴へ  
出れど英國王も是と信ぜず因りて  
猶西班牙不傳手と求めばゆど承ひ  
出けとバ西班牙の女王「依撒伯刺

閣龍グ策と善とぬどもは時戰爭の後少く金銀之資の折  
られば其入用不差支え時窘けとど閣龍グ志氣確呼とくに撓  
まざる不感激る一女王へを號して離する佩物の裝具の宝玉  
と悉く賣拂ひ夫が價を以て艦三艘と船中の用具と調へ且乗  
組の人數百廿余人と貸與へけれバ閣龍ハ雀躍一て大不喜悅至  
小安達慮西亞の地の「巴魯斯港」より岡航一て西不向ひて走る  
と三十四日不至ると誰とも天水空谷渺々と而已川へ備置只  
ツの小島とさへ見出一得哉適水涯不峯作る雲の人と欺く不垂  
オリされば船中の人々今ハ困難不堪えず一て終不恕りと取  
岡龍と罵つて云々「巴魯斯奏と出帆せり」既不三十四日の呂風

波と凌ぐを來とど夫うと思ふ岩と不凡ず然とば今日より後  
三日と走せ四十七日と經つとも猶國土と足あらざれば海と殺して  
海を投送と妄言を吐て國王と惑へ一朝衆人とも脳一苦一あさ  
る報ひ小因て其罪科と正をべーとあは不閣龍へ乃理のゆ思  
ふりのうち今日水中不地方近き不非ざとへ產せざる魚と凡且  
水の技术実の附くるもの漂ひ来る不逢ば心中不一倍の勇  
氣と生ド一人の船役「卫スコヘトル不言と含めて帆柱へ登せば  
「卫スコヘトルハ閣龍の言辞と守り心と爲て西と望み瞬もせま居  
リ一木牙三日目不當り忽地此地の山と見出一帆柱の上より大音  
声にて呼ハリけきバ船中一同始めて喜悦一船將閣龍が前不來

り拜伏して無礼と倍礼うめて三艘の船一つの陸地へ着けとば閣  
龍の上陸して此地永く西班牙の領地あらんと誓ひうことぞ是れ  
則巴那麻群島の中の一小て此地の人民初め閣龍が船と望む  
形ち廣大されば船と云ふと知らず張上さる帆の羽翼ふいて水上と  
翔る怪物の頭と一ふと思ひ發炮の響きと聞て吼ふ声と驚き  
皆深林不逃遁して容易ふ出合ハシリと云ふ佐又閣龍は近  
き傍りの島々と巡覧を一處と亞細亞島中の一部落をうんと思  
ひ謬りば地と一く西印度とぞ称へク故不亞米利加島中の西  
印度の地名あると閣龍よ初ももと實ふげ閣龍が亞國の航  
海の古今未曾有の大勲功と称をべー然まに合衆國人倫の法

此時よりて屢々初め家と造り農商の道と設け大いに鑑山の  
金穴と見出す小至り西班牙國ふ於て倍莫大なる大利を得  
り然れど西班牙王讒者の舌頭ふ惑ひと生ト閣龍と亞米理  
加の新冥地より鍛り鎖を繋ひて是と本國へ呼戻せ一小更  
一ツの罪科も無とばれ不赦一て放一これど今ハ用ひず成トリケ  
閣龍ハ西班牙王の我が有功の恩と忘れ德不背くの事と憤り彼  
の鍛の鎖を室の中ふ掛け我死せを共ふ此鍛の鎖と埋むべし由  
々遺言あり齡六十九歳小一て終小黄泉の容と成トリ大有功  
の英勇も少く不幸小身と絶ふ誰う遺憾小堪えざらんや閣龍  
亞米理加と見出せ一ハ日本の明應二年の秋小一て今トリ三百

八十二年あき其後數年と過て英吉利人け地へ渡り來リ慢り  
ふ國土と冥んとあとど西班牙人是と赦ニテ數回拒ニ戰ひて英吉  
利人と追走ラリテ少くとど英吉利王是不属せず於勇將と撰ミ  
精兵と選つて再び多勢と押渡一一大いふ此地と冥うるむふ其  
威勢猛烈るれば度へ敢て拒む者なし爰お於て英吉利人  
益四方小跋扈る一漸々盛ん小成不及び西班牙國の冥地次第  
小減少セ一うバ西班牙人兵と拳て再度英人と戦争不及び  
どは度へ西班牙人敗走セ一故倍冥地衰微セ一うど閣龍と尊崇  
きるを依然とて昔小夏ラスレ人と以て亞米利加の國祖と  
敬ひ尊ぶ故小都府「華盛頓」の地辺までも「コロンビアとぞ呼び

做一けり

諸亦「包巴丹船」へ三月十八日より「カリ  
ホルニア島のサンフランシスコ港」と出帆  
ヨリ壬辰三月五日至り十七日めにノ  
「巴那麻」の港へ着岸あす港内ア  
亞米理加の軍艦二艘ありて祝炮發  
發す當地の人氣悪一ヶれバ不時の  
備へふとて常小番船を置ヨ一午の刻  
ヨリ大い不雲起り大雷強く雨日本  
のタ立ナシヨリ總てサンフランシスコ



あり「ハナマふ来る路の「メキシコの海岸へ年中雷鳴あるを多きよ  
夫て  
ある廿七日ふ帆柱の上へ鉄ふく作う一劍の如き物と揚げその劍の如  
きもよう鎖と引下げ下げる鎖の先を海の中へ入セテ是雷除ふ  
て雷若一船中へ落る時へ雷とば鎖が吸音せて水の中へ落一入  
の仕掛キテ今東京の中ふも此雷除の杭の建くるところ稀ナハ見え  
避雷柱へ鍼の棒の太ニ寸長ニ三丈みるを常例の物とみる  
雖も都合不因りてハ些の高低へたりても宜一柱の先へ長ニ  
二尺計りの銅の針の先へ一寸六七分程の銀の尖りと附る  
又銀溶汁ふゐる物ふても宜一溶ゆ離せざる極不捨一其

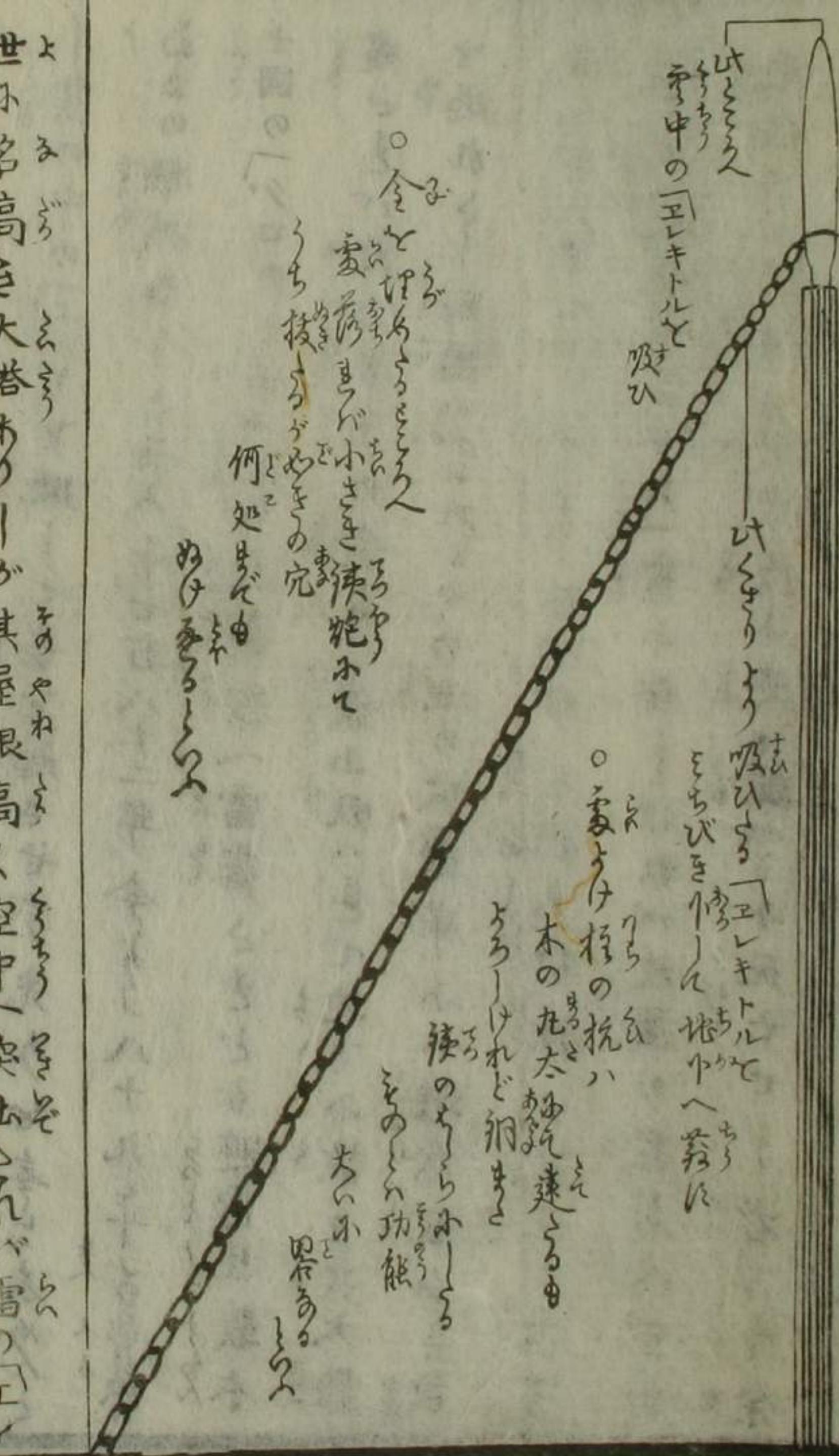
夫りの銀より鍛錬ふとも鎖ふても引下げ其下げうる金不鏽  
の出ざる板不何色の画の具ふても塗置候下げる金の先と井戸  
の中水溜桶等へ入ると宜とす前ふ雷の條下ふも説了づ如く雷  
電共不雲の中不生ぞる「エレキされば其エレキと鍛の棒の上の  
尖り不吸焉せて鎖どり身を下げ水中へ落一地下へ散す  
夫も故鎖錠出でハ「エンキと身く不十分からぬき然ども一本  
の柱ふて遠く離とく處の防きハ成一難けどバ廣き場所おひ  
何本も建置べ一避雷柱の定法ハ防ぐと思ふ場所す高さ  
六尺あとバ其四辺一丈三尺の防ぎとく高さ七尺あれハ一丈  
四尺の防ぎ不成とあり全く避雷柱の工夫ハ雷を避るが爲ふ

非ず雲中の越力と夫りの銀不吸焉せ鎖どり下げる地中一小散ら  
一雲の中の「エレキと貶一て音と起させず光りと身をあわんと  
ナの機械ありと云々千七百八十二年今より八十九年お普魯  
ス國の「クロガ」と云ふ處の火薬庫一雷落ことども避雷柱數本  
達ことば彼の夫りの金より鎖ふ吸へきて地下小散り其大難  
と逃れう同國「ブレスシヤの地の火薬庫小ハ避除柱ふと故  
千七百六十七年今より百四年おは火薬庫不雷落て積賄一  
方火薬是がねふ凡一勢小發一ければ近隣の家居人畜皆  
飛散つて形体と見ず後不是と調べる不死亡セ一者三千余  
名ふ及びうと云へり又ヘ子チヤ國ふ「シントマアクの塔とて

西洋新書  
初編之二

はくさりと吸ひし「エレキトル」  
を中の「エレキトル」と吸ひ  
。金と銀と銅と  
麦わら毛と小麦と燕麦とて  
うち枝の根と  
何處生るか  
めぐるしく

。木の太枝と連なる  
うちけれど羽毛  
後のちらみの  
大きな功能  
大の木  
界ある  
え



世小名高き大塔アーチが其屋根高く空中へ突出されば雷の工レ  
キの導きと成り一々往昔より雷落ふて数回少して破損所多  
く是が修覆小莫大の入費と掛一ヶ避雷の法定け早く柱と達  
アーチ小其後い何程雷鳴ある年少ても「シントマアクの塔の近  
傍り不落ふと悉く此災害を避くも全く「仏蒙克林」窮理  
の餘澤ありと云へり

諸又巴那麻の港少くハ包巴丹船入津あると見て商人等頓々小舡  
と漕連ねて種々の菓実と持来るあり「ヘナ、アーチ芭蕉の実と  
一ヶ「オレンジ」と「ハバナ」橙不似う「ハイナ」ベルヘ松の実の如く「ホシ」  
ガレシとい柘榴の事かり色青く桃ふ似うありあり其樂丸  
西丸の類もありて何とも美味あり又「モモ」子イドとて承子  
砂糖と澄げと交ぜて賣ふ来る小炎熱にて咽喉乾けば

其味ひ得も云れぬ程の美味く覺ゆども餘り餘斗ふ用ひとば服合  
ふふ惡一又種々の變り酒と持來りて進める小價ハ他所より下直  
あれどり大抵僕物不一て味ひ宜一からだに邊ハ熱病の多き處也へ  
食物ハ隨分と心附てよし夜ふ入り船の上へ多く當來り通交ふゆ  
捕えて是と見るふ皇國の螢と變りふとか一翌六日河蒸氣船ふ  
乗リ移り波戸塲ふ至るは港ハ海遠淺小一て大船岸まで着され  
ばより波戸塲の棧橋を上り車ふ大輪車へ通じるふ見物の諸人  
前後左右ふ群集ぬせりば辺の主人の色黒く黄を髪の毛縮毛  
多く裸休素足ふ一て其様最端一殊ふ旅人の荷物の中  
小金子などと見せば忽地不搔浅ひ棄ひ取て逃るをとば合衆國の

人もは地の人氣悪ヒトハ殆んどなれ  
と做せども他國の領分ふとハ是れを  
制する能ハざるより暫時ありて火  
輪車走りぬきふ四辻只一ゆんふ裏き  
渡り恰も數百の雷鳴頭上へ臨んで  
落つたが如く思ひき側小居て肩を並  
る人の言葉も通せざる程かれども  
坐席静か一て身體揺動あると  
カ一鍊路ハ山と厓と谷と埋め河ハ  
鍊橋と渡一險岨と平地と為一かど



走る切通しの路多し。地常ふ雨多けとば降らざる時といども  
雲霧深く溝堀の水涸りほれて清灑ある物絶てか。山ふ紅葉かく  
澤ふ枯草かく峻嶺四方と圍りて聳へ林藪丘陵と捲ひて茂り  
目の觸や處ニカ青々蒼々とする樹木草茅下へ更ふ樵父の跡も  
見えず谿水の音幽々不復え見訓ぬもの古木ふ鳴かどその景色  
寂寥と一て虚淋一く虎豹蠻などの猛獸も斯る奥山ふこそ住  
むべけとと只へば自づと毛穴も亦立て覚ゆるあり。備火輪車へ  
「ハナマ」と「アスピンウラルとの道の半途ふ休むば所小三階造りの義  
麗ある家あり是我が國の立場茶屋の類ひかせば爰ふて午飯を  
喰モ「ハンふテ葡萄もと桃の実ふ似くる草實と牛肉とかり

喰ヲ終つて又車を走らせ暫時ふ一て「アスピンウラルふ着す」ハ  
マより是迄の道程二十二里余のところ途中喰事の間入りみどり  
とまど僅か一時半ふ一て来る其早きと押て知るべ。一借又日本使  
輩の人々ハ「ハナマモ「包巴舟船ふて來り」す。不。」「包巴舟船  
の人々ふ別と上陸ふ。「アスピンウラル港ふ至る爰ふハ又「ローノー」と  
いふ船先年より日本人とおぼれして居たが其日在下「アスピンウラルの  
地より「ローノーク秋ふあり」と「ニヤヨロクヒ差して出帆ス。

華盛頓府の説

亞米理加合衆國首都「華盛頓府」ハ大統領住居の地ふ一て「ホート  
メント」と云大なる河ふ添て市街とあす町の廣サ東西二里弱南北

西洋奇書  
初編

一里弱人口六万余時候ハ皇國カ東  
京ニどすリ余程暑一夫ウレハ雷ハ至  
つて多ケヒとども地震ハ罔爾以来  
大いかるシテのあく西ナリの地カモテ  
ハ稀ニ地震アリ然れどモ燐す物  
の落スミドリノヲハ絶テアリ是ハ近キ  
四辺ハ噴火山アケシビ水氣盛んシ  
テ火氣少シキ故カリトぞ市中ハ薄市  
廣く其大いかる處ユヘ二十間或ひハ  
半丁ホ至リ種々の樹木ヒ兩側ヘ植地



所々小草花の園ヒ設ケ馬車通行の狭路ハシメテ不縱横セリ大棟梁  
カ館ヒ鍊の丸棒ヒ以テ周圍の垣ヒムク中央ホ一ツの大門アリテ中  
小大ある家居建リ堂上の正面ヒハ大祖「ワシントン二代目」チヨキソンの  
木像ヒ置く何とも立像アリヒ館の摸様アリドリュ我朝の門跡の  
造営不似テ要害の掘ヒ無く又石垣の設ケル無く護衛の人数ホリ  
更ホ玄一モ羨羅ヒテ一これどリ雜人の家小較ぶシバ是リキニ至  
キシホハアラズ却く市町の家造ヒハ造葉の廣大あるト低シヒ五  
階高シハセ八階ホ及び地ナリ屋根までハ十七八尺ホ過ヒリのアリ取  
分け宿屋の家居廣大ホ一テ四十間四面或ひハ五十間四面の築造アリ  
ハ五十間四面の宿屋ヒ座鋪の数八百余室ホ一テ下ウ召シ階

子の數十八登らざれば一番の上のものへは陞られず此家の階子の數  
七十五脚あり座敷の内小酒店二軒喫茶種店一軒小向物店  
所多業務店書物店髮結床などあり是いは國小くい小さな表  
と速ると停止して小さき家を遠の征の外代ふては破損場あり  
ても修復形届うず捨置がちされば自然又苦労より行き是と  
外國人ふるらとて國の耻辱ありとて禁するよ夫故小裏  
店の類ひ一切裏店住居にてす日とて送る御の者へ皆旅籠屋  
の度姿と借りて不景と持あり然とバ二代も三代り旅籠屋  
住居とて居る者あり飲食いも旅籠屋の焚火にて宿貲  
の多き者ハ都度ふ食物を我が居向へ取寄せ宿貯の少き

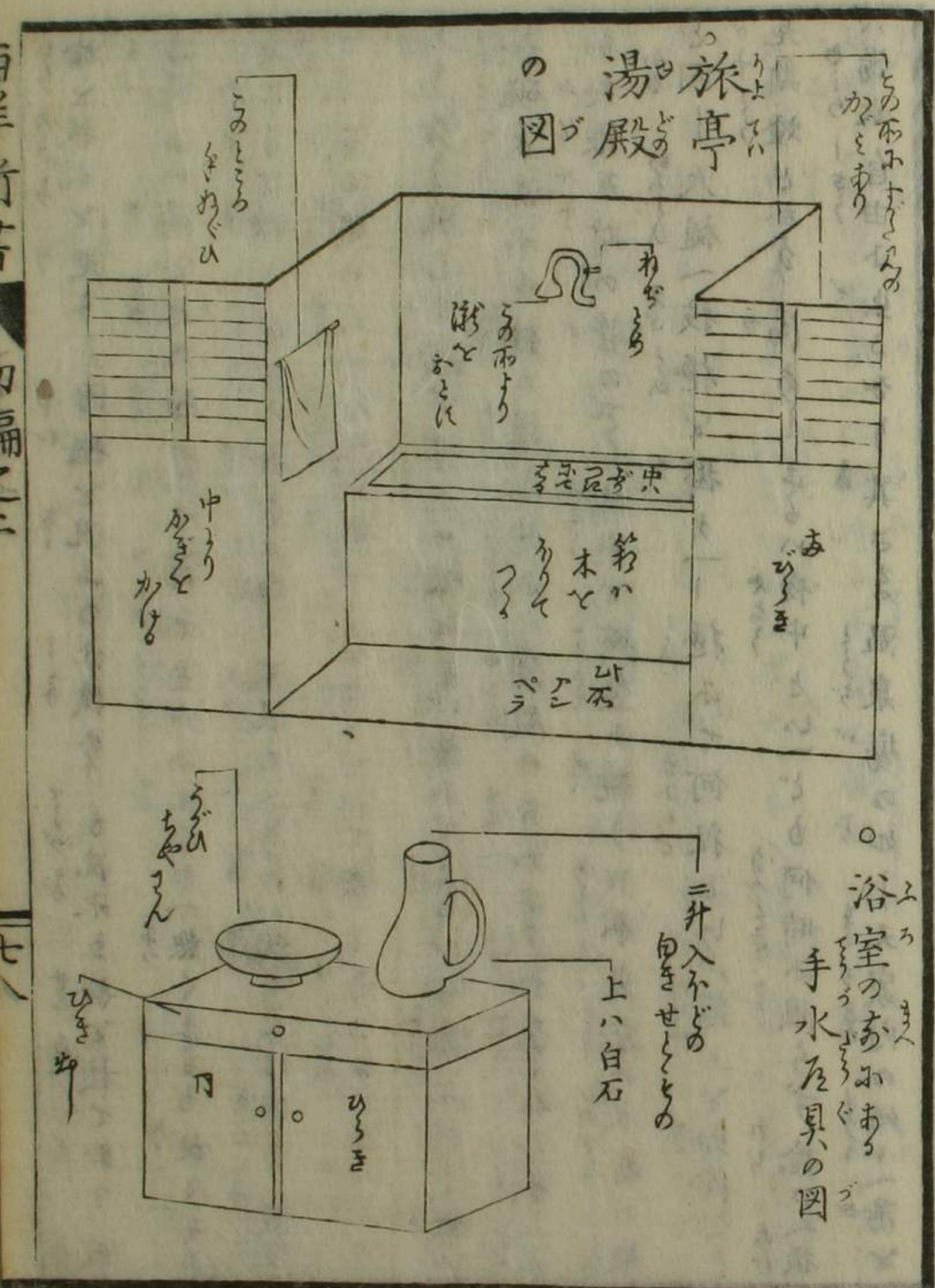


パンナリヨリ我朝の裏店住居より替りの旅館屋住居とども  
座敷ふへ方毎不姿見の鏡と建額と掛け時斗<sup>トモ</sup>の種々の置物を  
と傍り付腰掛簾笥「カウブリ」室の中とすと寐床の類ふ至るまで表  
簾とモ<sup>テ</sup>て搭へ<sup>トモ</sup>又召毎の隅の所ふ紐の下り<sup>トモ</sup>へ宿屋の者と呼  
とモ曳紐<sup>リ</sup>にて「サンフランシスコの旅館屋の條ふ姿細鮮<sup>トモ</sup>  
アーリ理加人の形<sup>トモ</sup>ノ華盛頓府の町ふて家と建所帶と持す  
百万弗の金を持<sup>トモ</sup>とば成難<sup>トモ</sup>一といへり餘り小大造<sup>トモ</sup>木本  
やれど女他行<sup>トモ</sup>ふハ一人の身の餽り小千弗より万弗ぐらゐ  
掛ると云れば家の造作諸道具何とも夫小准<sup>トモ</sup>故一向不空言  
うとも言難<sup>トモ</sup>べ<sup>トモ</sup>後日より確證<sup>トモ</sup>記さん

諸<sup>モ</sup>夜<sup>トモ</sup>入<sup>トモ</sup>ハ瓦斯燈<sup>トモ</sup>を設<sup>ケ</sup>是<sup>トモ</sup>燈<sup>トモ</sup>瓦斯院<sup>トモ</sup>日本<sup>トモ</sup>掛<sup>ケ</sup>燈<sup>トモ</sup>  
極<sup>モ</sup>所<sup>ヘ</sup>用<sup>ユ</sup>石炭<sup>トモ</sup>氣<sup>トモ</sup>管<sup>トモ</sup>先<sup>ヘ</sup>取<sup>テ</sup>照<sup>キ</sup>て管<sup>トモ</sup>の口元<sup>ハ</sup>金  
減<sup>ク</sup>金<sup>トモ</sup>草花<sup>トモ</sup>或<sup>ヒ</sup>鳥獸<sup>トモ</sup>どの形<sup>トモ</sup>鑄<sup>シ</sup>一<sup>トモ</sup>風<sup>トモ</sup>防<sup>ぐ</sup>硝子<sup>トモ</sup>の笠<sup>トモ</sup>  
以<sup>テ</sup>ある故<sup>トモ</sup>照<sup>明</sup>の麗<sup>ハ</sup>一<sup>トモ</sup>露<sup>トモ</sup>如<sup>一</sup>け燈火<sup>トモ</sup>座<sup>敷</sup>ハ勿論廊下雪  
え<sup>ヌ</sup>風呂場<sup>トモ</sup>小至<sup>ム</sup>まで幾箇所<sup>トモ</sup>と<sup>ク</sup>く燈<sup>トモ</sup>連<sup>ね</sup>れば明<sup>ル</sup>き<sup>トモ</sup>屋<sup>トモ</sup>  
如<sup>一</sup>瓦斯燈<sup>トモ</sup>根元<sup>ハ</sup>華盛頓<sup>トモ</sup>市中<sup>ハ</sup>只<sup>一</sup>所<sup>ヘ</sup>小<sup>トモ</sup>地<sup>トモ</sup>中<sup>ヘ</sup>鍊<sup>トモ</sup>  
大管<sup>トモ</sup>掛<sup>ケ</sup>大管<sup>トモ</sup>小管<sup>トモ</sup>枝管<sup>トモ</sup>掛け是<sup>トモ</sup>家<sup>トモ</sup>の中<sup>ヘ</sup>入り口<sup>の</sup>門<sup>トモ</sup>上<sup>往</sup>  
來<sup>ハ</sup>常夜燈橋<sup>トモ</sup>の上<sup>ハ</sup>燈臺<sup>トモ</sup>小<sup>トモ</sup>數限<sup>リ</sup>と<sup>ク</sup>く燈<sup>トモ</sup>連<sup>ね</sup>れば白  
登<sup>トモ</sup>明<sup>ル</sup>く<sup>トモ</sup>夜<sup>行</sup>する<sup>トモ</sup>提燈<sup>トモ</sup>用<sup>フ</sup>と<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>と<sup>ク</sup>  
瓦斯<sup>トモ</sup>ハ西洋詞<sup>トモ</sup>一<sup>トモ</sup>煙<sup>トモ</sup>豆<sup>トモ</sup>杯<sup>トモ</sup>空中<sup>トモ</sup>立<sup>ス</sup>昇<sup>ス</sup>物<sup>トモ</sup>云<sup>フ</sup>

瓦斯(ガス)を製(さく)する所(所)は石炭と金の内(うち)で密閉(みつめい)する。是(これ)を蒸燒(じやうやき)するが、石炭の瓦斯(ガス)は氣(き)則炭化水素瓦斯(エバス)不(ふ)して之小火を點(てん)すれば空氣と合(あ)て燃え其光り明らか不(ふ)して油端燭の燈(とう)より麗ハ一千七百九十八年今より七十三年、お日本の寛政八年、お英吉利(イギリス)に於て初めて瓦斯燈(ガスとう)と用ひたと云々夫せしより以來、製法遂(つい)て定け今ハ何れの國(くに)にても繁昌する都下(みやこ)にて、商社と告び瓦斯燈(ガスとう)を製(せい)して一ト管(くわん)付何程(どく)と云々走行と極め是と市中の家々(じやう)を賣(う)て双方の利益を得ると云へり。

諸又水と呼ぶも自由にて、毎小流(よご)の施設の處(ところ)に栓(ふた)あり、其栓(ふた)と抜(ぬき)ば、何時ふても水進走(すす)り出る。又雪隠の壺(つぼ)一度(いちど)に小管の



捨と抜水と走ら一汚穢と洗ふの仕掛けありて洗水も捨と抜て出す風呂場ふハ湯と水の捨ありて湯水自由小出るも一熱くとも鉢くもる人まと借りぞ一て赤ずるより風呂の入り口ハ向きて内す銚と下す彼の國の人ハ他人小肌と見せざるを以て常とあるれども一人入りきり風呂の側小姿見の鏡と至べ鏡みて見るがら洗ふべ一敏い茶碗を洗水の鉢の傍り付ホハ湯殿のあふあり外を小て半水も矢張瓦斯の管のぐく地中を横豎ふ続り日本東京の水道の樋と同一大樋へ枝樋と掛け一ト極ふて何程とりよ運上と知れこと瓦斯燈とおも湯あくちるに夜中といども何時不限らず捨と抜バ湯水自由小出るあり其さま温泉場の如一又家内の處々へ湯と

廻モ不ハ大なる蒸氣の仕掛けありて皆は廻す極不て死る所いや衣服と洗濯する所も人まと用ひず大いかな湯船ありてその湯船の内へ汚きる衣服を入れば中少仕掛けにて是を動かすを以て洗ふより汚穢を棄不落て業早一又水と絞る仕掛けあり是ハ差度一間斗りの九く深き益あり絞らんとある衣とその中へ入れてある所の蒸氣の火氣不て暫時の万不乾き雨天不ても差彼の器石臼の如く回りて急地水と絞るより物干少く蒸氣仕掛けありて廻す所で四間四方斗りの箱の如き物なりその中へ入れてある所の蒸氣の火氣不て暫時の万不乾き雨天不ても差支る所どいふ事なし都ての仕掛け實不ユ少操り諸事の弁理と盡しテ借す所あるよの人物ハ多不く歐良巴人の種なども

在來の亞米理加人も多く多々歐良已の人もハ男女も白色  
白く丈多く亞米理加人の丈は色羽色小して丈すかび然  
きども歐人し亞人との雜種あまぐ是等ハ混にて分ぬ小區  
為一カ

世東の入種五種あり一小莫古種二小高加索種三小以日阿伯種  
四小巫來由種五小亞米理加種等小一て其微効とある処大畧  
左の如き

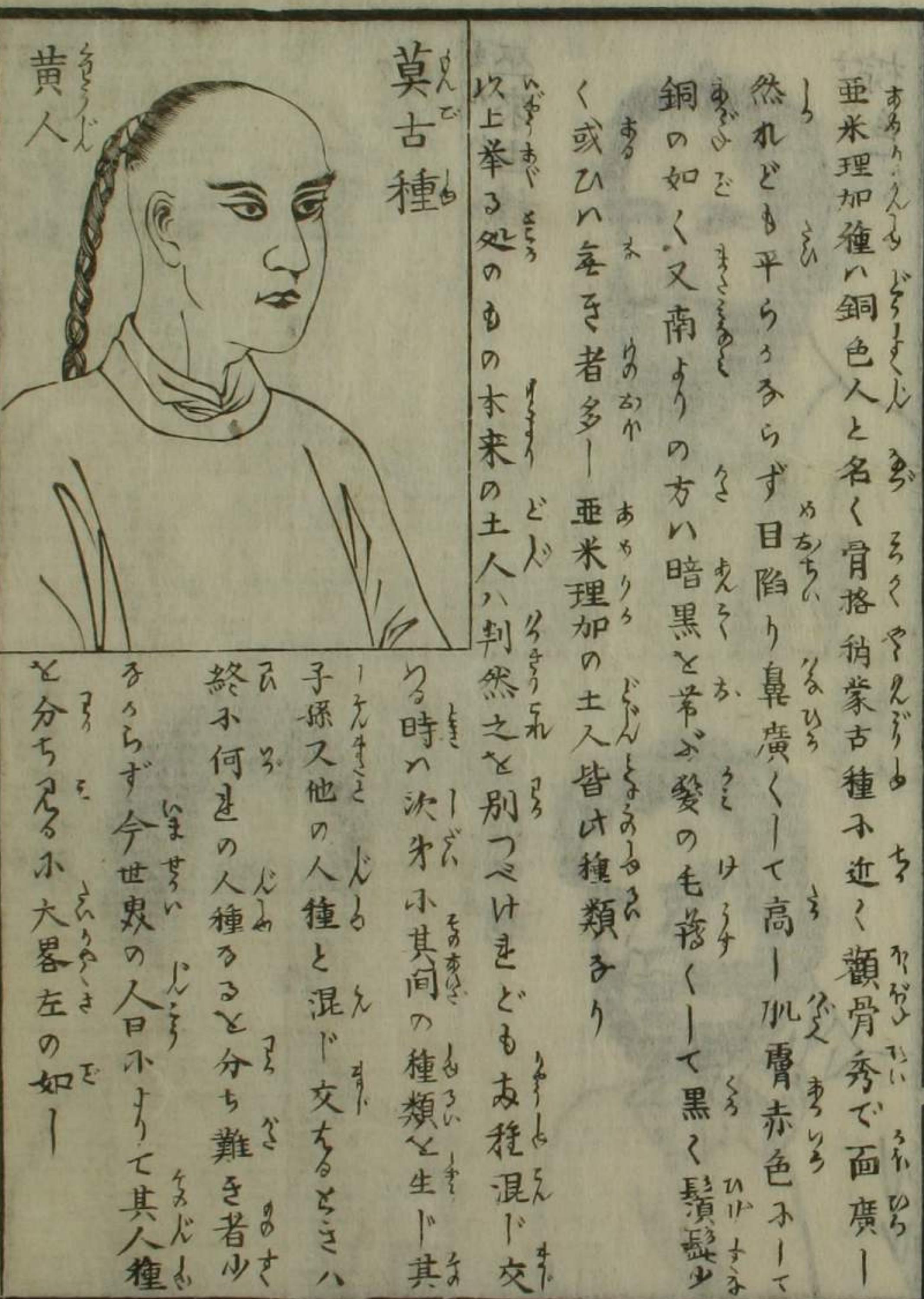
莫古種ハ黄人と名く頭方むりて顎平く顴骨秀で鼻高からず  
皮膚黃土色或ひへ褐色ふれて髪黒く鬚髮少々く或ひへ無き  
者あり丈高からず物多一け人種亞細亜の中央より日本支那

滿州後印土等の人民皆是なり又歐羅巴の方芬、ラ、フラン  
ド人及びエスキンモーの人種も皆之小属を又土耳其人の其種混  
和する者多しといへども多くは莫古種なり

高加索種の白人と称す頭圓く顔瓜実ふにて前額直ふにて  
高一鼻高く一て眉毛の上より起る顴骨平らりふ口唇少々  
丈長大脛脛骨の鶴形色みて髪の毛褐色あり眼色碧みと  
えりうるべ じんまみふゆふあ  
歐羅巴の人民皆は種教たり然れども日光を受けるの烈りを  
えりうるべ あ  
ふ於て其色暗黒ふ至るゆめ有り歐羅巴の南部の方の住  
えん しづ ちやうじゆ あ  
民へ次第小褐色を革ぶ又亞非利加の方及び亞拉比亞印  
ぢ ぢうえん あ る  
度の住民は種類多きども炎熱の地方ふ在る者へ其色暗黒ふ

して焦土の如く

以日阿伯啞種ハ黒人と称せ頭故く左右より抑き如く少て額  
傾きて尖り顎骨高く鼻蓋げ鼻の穴大あり口唇殊少厚く且大  
小一く前ふ突出せるが如く肌膚漆黒ふ髮の毛縮て卷たり亞  
非加刑の土人皆は入種かれて又亞米理加刑少於て奴隸となる一使  
みの多一皆亞非利加刑より移せる处あり澳大利亞那吉尼諸  
島の土人又は種類とある本邦人ともと黒坊々  
巫來由種ハ棕色人と名く頭狭く顔廣く顎骨秀で丈大きらず  
肌膚黃褐色髮の毛多く一て黒く柔う一蒙古種似テ印度  
度諸島及び巫來由半島の土人皆は種類あり

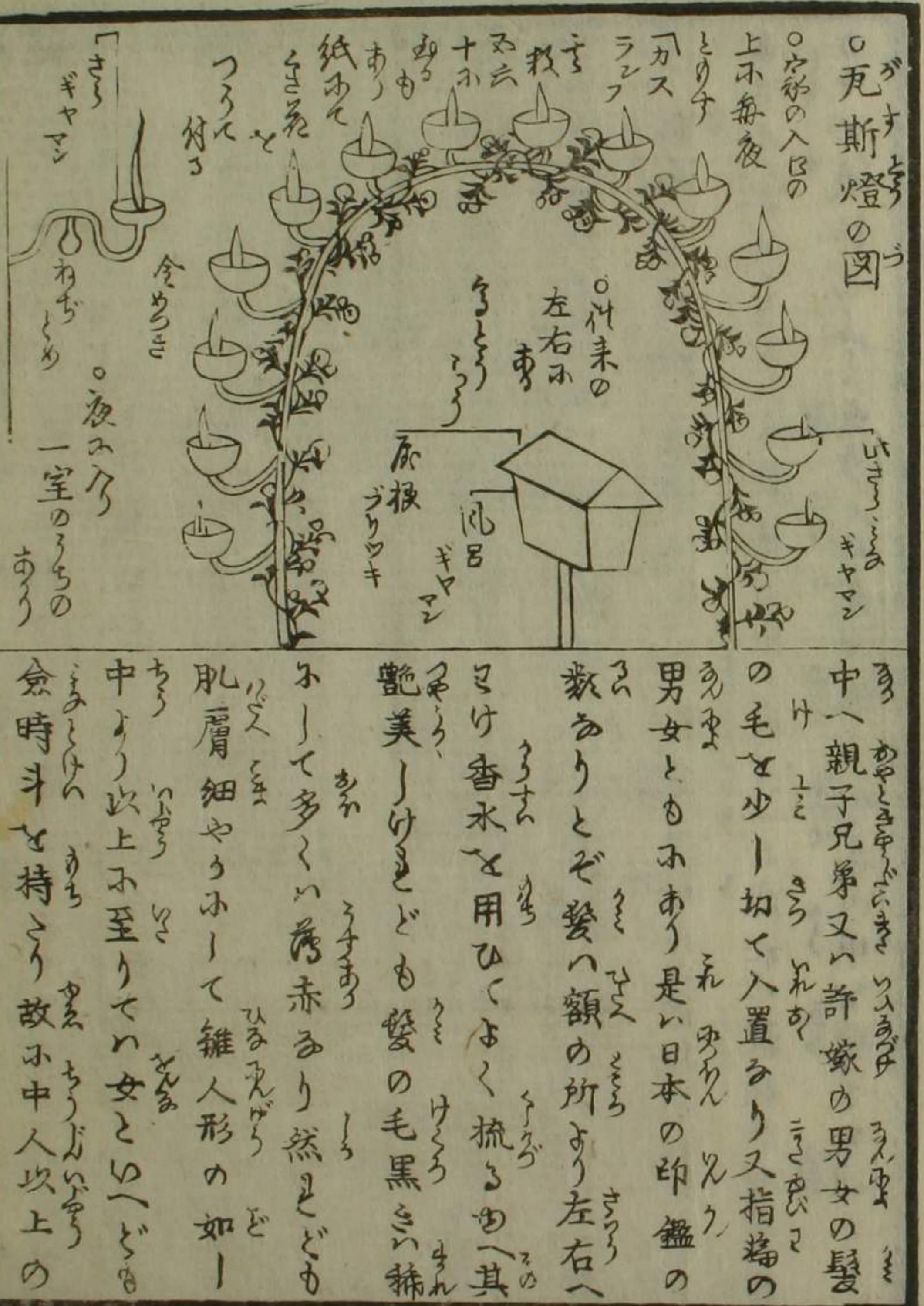


高架索種



○蒙古種 四億七千万 ○高加索種 四億  
八千万 ○巫來由種 四千万 ○亞米理加種 一千万  
伊來國小豆の男ハ羅紗の筒袖股引と着用モ冠リ物種ヤアソ士官の礼  
服い下小白き西洋布を着テ上ハ黒羅紗にて肩の筋へ金箱金糸を以て  
造り立るイボレウトと村子首の筋又金糸を以て巾一寸半の筋  
メ盤は筋三本あるセ東上とす冠り物一も金糸を以て巾一寸半の筋  
横小筋と縫合に額の所小ハ金を以て鷲頭等の形の物と分筋  
一本と革す戰場小も此服と用ひ具足の類別のみナーナハ羅紗不  
限らず都く毛織の物と用ひす縫布と以て服とあ一着るより然  
きども亞宋理加ホテハ養蠶の法未だ開けぞ縫糸ハ皆支那ナラ運

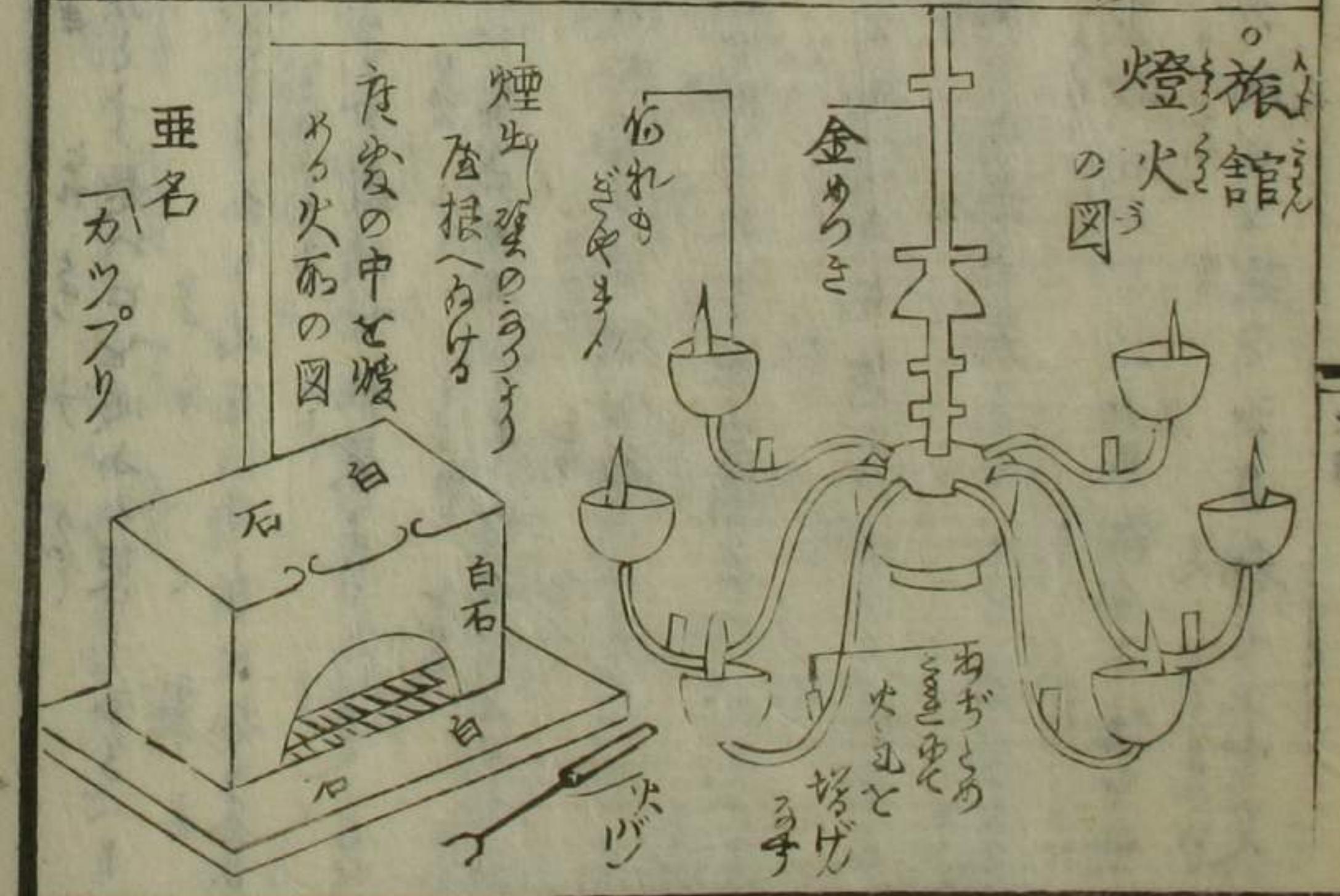
送一て佛蘭西ふて織出一又ば國へ持渡るされば貧き者径きよ  
等ふ至りてへ價高くとてよふ入り難い因りて夫ちの者へ皆居  
更紗を用やるをども汚れ垢染くる衣類を着るへ更ふかノ服  
筒袖ふきとも腰すり下へ「ホーブスカレンスと云鯨ふて燈灯骨の如く梅  
くく布と畜きて卷大なるふ至りてへ裾の所ふて差渡一三尺余及  
ぶ途中と往ふ少ノ引摺わど長」<sup>ト</sup>「ホーブスカレンハ十五六年あ佛  
先す<sup>ヘヤリ</sup>紫西より流行すトヤドムのふて總て歐羅巴亞米理加等ふて衣服髮  
の形ち等の流行へ佛紫西より始まると云一ト首ふハブレスレス  
と云輪と掛るよりは輪ハ金銀珊瑚樹水晶ギヤマン等ふて作れる物不  
くて種々の細ニあり其價百両より千五六百両ぐらゐ逆不至る比端の



婦人他出来るふへ一人の身の飾り千両より万両ぐらゐふ至る依て食  
べき者へ妻を迎ゆるゝ能いぞとあり女へ冠り物を取肩を出すと  
礼とすは國ふてい然て女を坐す一席の中不女を時へ女へ礼とあ  
して後男不れども近カノ女へ對して礼と為すふへ冠り物を除女  
をとむ男不禮とするふへ冠り物を除うざるを常とあらず浴を往ふより  
来る時へ男片寄りて是を通すや取扱ひ方日本不てちば下案  
の者の親分を多め教じ如レ男女口を吸ふの礼ハ親子兄弟後身逃  
みて寂寥まく親しき朋友をもと握り合ふその他ハ双方より  
よき出でがくたゞ然きども入魂牙一と成れば親族みらざる者  
も口を吸ひあふと云り人の手と握りきよの甲を擣るせ次と

我々せ人にふき又我はふ指と指次とす是へ口と吸ふの畧リカヨベ  
當國の男の礼い冠り物と相互不脱きとるあり又互ひかふと握り合ひ  
三度上デ下ダとゐるを入魂とすると女道路を往来するふ男と女を  
見けきとある夫の夫の者い是と同乃るす然れども簪烟と結ぶい男ハ二十一  
女ミ十八才ふ至らざるが然ハナ酒を飲も又全年不酒されば许さむ男  
の二十一才女より十八才あみて簪烟と結べん乳衰りへ自づと病ひと  
釀一且身体ふ力滿るふ至らズ酒う又是ふ整一くじて諸業の急  
りと引出ず故ト國禁とあるありた大人とりども握りふ酒を飲  
事と敵ふす日曜日とその翌日の兩日と敵もあり都て上官の人

多く酒を飲む醉て道路を渾浪つゝ  
下輩の者ふ限れり人是を大りふ卑  
一む日曜日小へ市中尽く戸を開高  
賣と休もとの容子日本東京の元日  
の如一は日ない人に寺へ往て法話の  
類を聞く者多一國中の人数て耶  
蘇教を信す處々寺あつて造築  
模様を奇き男女は處不群  
一説法休息のるい樂を奏す經  
文を唱ふと日本門跡の御堂へ往き



るが如一  
因不云世界中の國々如何るる蠻夷の寃けざる土地といども神佛を  
尊む祭らざるのみか一總て人かの及ばざる处に神仏にて是を能く  
あるべと思ひ日月雷電及び山林水火等を祭り或ひへ金石土木  
等を以て神佛の像を作つて之を祈る何をの國不ても神仏を祭  
るの教法大昔日より在りて初めは皆一つ教えありしが其傳來の  
久きよ種々の法式と成り其中不大有力の聖賢生る時ハ  
書を著へ一説を立て別の一種の教法と定め從前よりの教えを  
看破つて一派の法式を分る不なりて終不其種類の多き不至れり  
今是と分るとき一と多種の神を祭るよりと一又一と一種の神を

西洋新書 神教之二

一五五

祭るものとす一種の神を祭るの教は其一猶太教其二耶穌教其三回教是より其中又種々の門派ありて分れり耶蘇教は歐羅巴全洲大畧に宗旨不以て又諸州ふ蔓延り此教は開祖より以來人と一途ふ道不く故終不宗徒の者黨を結ぶの勢ひと生ド八百餘年を経て東部西部ヲ二派に分れ千五百二十一年今より三百五十年後あふ西部又ニウ不分る是則舊教及び新教の二二派ナリ耶蘇舊教又天主教となり又ハ派歐羅巴の南の國々不盛ん不以て中央の國々い西派相錯雜又南亞米理加州の人氏過半は門派不属す宗教として教師と諸州不出一我宗旨不導き入道と勉む昔日日本へ來り一も此宗徒か一て西洋諸教の中不最害多き宗教

カリと云へり耶蘇新教ハ英吉利及び日耳曼列國不盛ん不以て和蘭瑞西等の人民も大畧此門派不属モ又北亞米理加州ハモ盛んアリ希臘教ハ魯西亞不行ハれ土耳其布臘の人民ハ宗旨を信仰する者多一其外耶蘇教の種属不一て數多の宗名と異ふ一魯西亞、奥地利土耳其比耳西亞等の偏地不行ハヨリの許多在リ云ど是と詳ふせば猶太教ハ最古代の宗旨不一て耶蘇教より早さて遙遠あり初め猶太國不行ハシ其國亡びて後人民歐羅巴或ひアムラ理加州等ハ散在一トキドナハ宗旨を信仰キ回教ハ土耳其アラビア比耳西亞等ハ一般ハリテ亞細亞の西ノ國々中中國不蔓延リ印度の島々不行ハシア非利加那の

東北埃及努皮亞等ふて信仰多種の神を祭る教えの説  
さうふ奇怪にて人情不背きると多一印度より支那西  
利亞等不盛に行ひれ亞非利加亞米理加の中の定りざる地澳大  
利亞新西索等の島國の未開地一般不之々信仰せ然ど一ツ  
教え非ぞ其地の因り教法の乃種々不別とて其宗旨最も  
多く偶像を祭り或ひ日月山川樹木禽獸骸骨土石器械等  
を崇め禍福吉凶等ふ至らまて皆悉く神仏の意不生るとして  
之を祈り又死後の冥福を希ふ其中最盛ん不して深遠を妙  
す。空理を談するもの婆羅門教及び基督教かゝる婆羅門教  
ハ基督教より遙ふ古く盛ん小前印度が行ひる基督教ハ印度

の錫蘭島及び後印度支那蒙古滿洲西比利亞日本等不押一蔓  
延其他妖魔靈鬼を使ふと言を信へ或ひ日食と懼と或ひヘ靈  
現と尊むなどの種類甚ざ多く又基督教あり専ら人倫の道を  
講ぎ支那より起りて稍隣國ふ移り廣まり日本最は教えた専  
信を然きとり基督教の他各國の教法何より人事未だ定けざる  
當つて勸善懲惡と解暴戾ある風俗を改め世不大益ありとひど  
盛んからふ及んでい却く人智を皆ます多くして僧侶の權の  
盛大ふ至り既に歐羅巴州中ふ耶蘇教のゐ不亂と生ド  
事無きの人民を多く殺せり東洋諸島不於く夫等の事係  
最多一

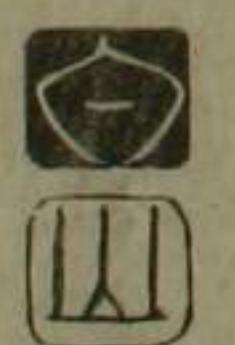
華盛頓府の合衆國の首都ある故に記す可き物甚多く初代  
大統領華盛頓戰争は一代の畧傳す。南北亞米理加戰争の大根  
又その國の政事、病院、病院不至の教院、博物館次で妓女屋の模  
様戯場狂言の仕組人寄観物の容子迄何くとも無く書んべ  
3. ふ既小猪數の限り不至とば筆を止めて次編不譲りね

西洋新書初編下

西洋新書二号より逐條まで移既不文續て出版

官許 明治五至申年中春刻成

瓜生政和編輯



橋本玉翁正画



梅村宣和藏梓



東京  
書林

大和屋喜兵衛

發兌

官許

瓜生政和編輯

# 西洋新書

初号  
全部

東京  
書林

寶集堂發兌



